可児町粘り塚古墳発掘調査報告書

岐阜県可児町教育委員会

序

粘り塚古墳の調査が完了した。調査に当った中島勝国主任調査員を中心に，亀谷泰隆・続木正両調査員，または，発掘調査に協力された地元の方々に深謝する次第である。

羽崎・瀬田両地区のいわば背にあたる丘陵の一支脈の頂上に位置していた当古墳が，今回，人口急増に伴なう「可児町第7次上水道拡張事業」の配水貯水槽の建設地に決定し，町内での位置・標高等から当地点より他の代替地がなく，止むなく発掘調査をし記録保存することとなり，発掘調査を実施したが，既に古墳は自然的崩壊をしていたようであるが，発掘調査と同時にされた当古墳と同一洞地域の分布調査をし，数多くの古墳が存在していることが確認されたことは幸いである。

昭和52年3月

可児町教育委員会

教育長　金子栄五郎

粘り塚古墳発掘調査調査員構成

可児町教育委員会・教育長		金子栄五郎
可児町教育委員会・社会教育課長		鈴木利一
調査主任	岐阜県考古学会々員	中島勝国
調査員		亀谷泰隆
〃		続木正
県文化課		波多野寿勝
可児町文化財審議委員		金子数雄
〃		森川益三
〃		金子一郎
〃		安藤寿作
〃		佐藤鎬平
〃		奥谷一勝
〃		稲垣雄之助
〃		平田録郎
可児町教育委員会・社会教育課		小沢末広
〃		吉田利世子
〃		森久雄
〃		各務洋子
〃		田口茂
調査補助員		可児貞子
〃		渡辺三千子

目　　次

序
1. 粘り塚古墳の位置……1
2. 調査にいたる迄のいきさつと調査経過……2
3. 墳丘の状態と出土品……3
4. 周辺の古墳分布……6
5. 結　　語……9

挿図目次

挿図1　粘り塚古墳付近の地形図……1
挿図2　粘り塚古墳地形実測図……3
挿図3　墳丘断面図……5
挿図4　周辺の古墳分布図……8

図版目次

図版1……粘り塚古墳の遠景・近景
図版2……発掘状況・出土品
図版3……日吉古墳石室・同古墳出土石棺・白山古墳
図版4……羽崎中洞横穴墓

例　　言

1.　本報告書は，岐阜県可児郡可児町羽崎，広見瀬田に所在する粘り塚古墳についてのものである。

2.　本古墳の発掘調査は，昭和52年３月１日より同年３月30日にわたって行なわれた。

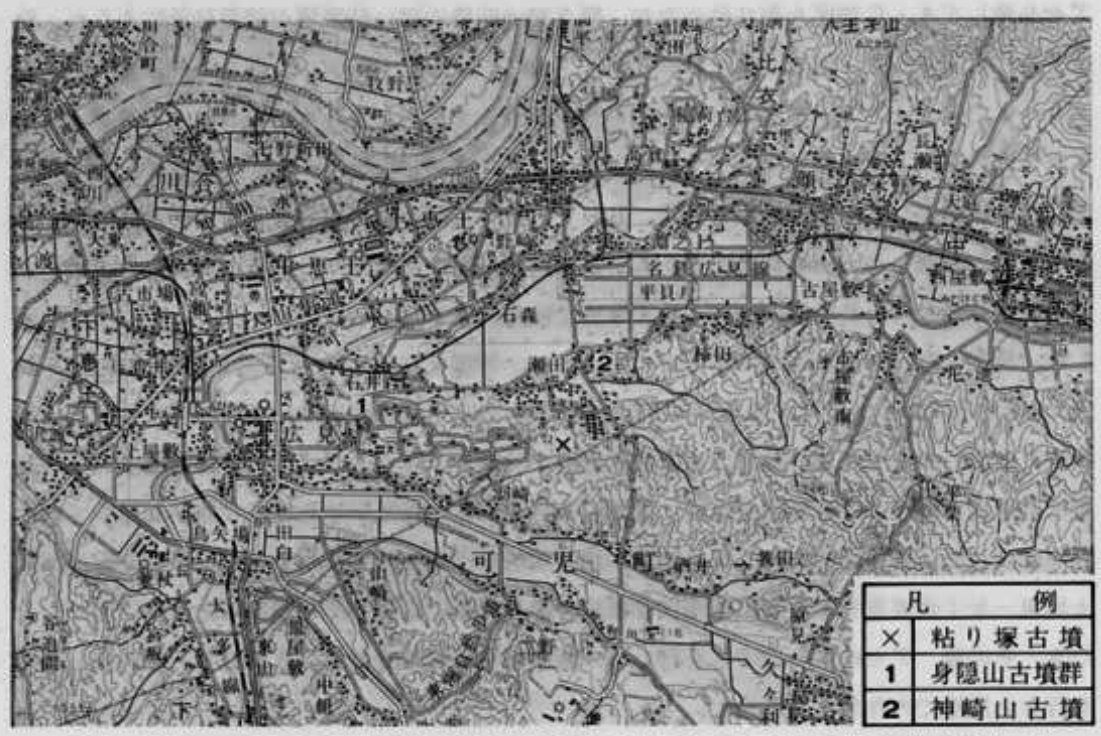
3.　発掘調査の主体は，可児町教育委員会であり，本調査の担当は，中島勝国・亀谷泰隆があたった。

1．粘り塚古墳の位置

御岳に源を発した木曽川は，木曽谷を刻み美濃高原を西流して加茂郡八百津町付近より，美濃加茂盆地に入る。ここで飛騨川と合流し，数段の河岸段丘を形成して濃尾平野へと流れるのである。この美濃加茂盆地は，中小河川の発達が著るしく，当盆地の南半分にあたる可児町に於ても，可児川・横市川・久々利川をはじめ数本の川が細長い洞を開析して木曽川に注いでいる。その可児川と久々利川の開析谷に狭まれた西に細く延びた丘陵の山頂の一つに粘り塚古墳は存在する，すなわち，瀬田・羽崎地区との境の丘陵山頂に位置するわけであり，美濃加茂盆地をすべて見わたすことができ，標高は181.6mである。

洞を隔てて，東北方向には昭和51年発掘調査された神崎山古墳（註1）が存在し，西方約1.5kmの丘陵西端には，身隠山古墳群（白山・御嵩古墳）があるが，周辺の遺跡については後に詳しく触れることにする。発掘区域は可児町羽崎，広見瀬田字巣元並びに東栄寺洞である。

挿図1　粘り塚古墳付近の地形図



〔本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号　昭52部複，第182号）〕

2．調査にいたる迄のいきさつと調査経過

粘り塚古墳の位置する丘陵は，古くから多くの古墳が存在するところとして知られ，当古墳も粘り塚・花塚あるいは狐塚と呼ばれていた。昭和51年3月「岐阜県遺跡地図」が刊行されるにあたり，精力的な分布調査が行なわれ一応の成果をみ，当古墳も周知の遺跡として公にされたのである。（遺跡番号G34－K04774）

昭和50年6月，可児町は最近の人口急増に対し，「可児町第7次上水道拡張事業長山配水池建設事業」を発表した。町教育委員会は，配水池建設予定地に粘り塚古墳が含まれることを知り，各方面との協議を行なったが，結局，適当な代替地が見当らず，昭和52年2月1日発掘調査実施を決定したのである。決定を受け同年2月25日発掘調査打ち合せを行ない，3月1日より現場作業を開始した。

草木伐採の後，墳丘測量を行ない，A・B・C・Dの一辺4mのグリットを墳頂部に設定。さらに周溝追求のため，巾1mのトレンチを4本設けた。土層観察用に基準線より50cmづつのアゼを残してA・C地区を掘り始めたが，厚さ30cm前後の固い砂礫層が墳頂付近にみられ，除去するのに苦労した。同じくB・Dグリット，ACトレンチも10cmづつ掘り下げにかかり，Cグリットで表面より5cm下部のところから徳利の破片を検出した。次いでBDトレンチ，ABトレンチの掘り下げを開始，各グリットと平行して作業を行なった。しかし地表より約80cmおとしても遺構らしきものは検出されず，BDトレンチでは，40cm程度で基盤である凝灰岩に達することが判明した。土層観察などから自然堆積の可能性が強まり，奥谷一勝委員に来跡いただき観察してもらった結果，自然による堆積で侵食により墳丘状に山頂がなったものだと断定した。発掘すなわち遺跡破壊であるとの考えから，慎重を期すため，さらに調査を続行，約100cm掘り下げたところで，各グリットをさらに1mのます目に区切り，4分の1を残して土層観察アゼ沿いの4分の3を基盤である凝灰岩層まで掘り下げることにした。まず各トレンチを凝灰岩層まで掘り下げ断面図を作成，並行してグリットの掘り下げを行ない完了を待って断面図を作成した。再び念のため，3月20日，地質学的な土層観察を愛知教育大学の吉田新二教授，大垣第一女子高校奥村潔教諭，蘇南中学校川合康司教諭，広見小学校岩田将之教諭にしていただき，その後，アゼの取りはずしを行ない，断面図を完成させた後，3月25日，埋め戻し作業を行ない現場での作業を終了した。

3．墳丘の状態と出土品

発掘調査地域は，瀬田・羽崎両地域の境をなす丘陵山頂に位置する。発掘調査以前の景観は南斜面に樹木が茂り、墳丘頂部を南東から北西方向に尾根道が抜け，北斜面は「はげ山」の状態を示していた。墳頂は標高181.6mを測り，径5～10cmのチャートの丸石が見られ，標高約179.5mの西北麓には凝灰岩の露頭が認められた。

土層堆積状態は，墳頂より土岐砂礫層・夾炭層・凝灰岩層の順序で，東西方向は，ほぼ水平南北方向は，わずかに南に傾斜して堆積していた。各層は色調・含有礫の大きさなどにより細分されたので，表1に示しておいた。礫が風化した土岐砂礫層は非常に粘性があり，またⅢ－4層，Ⅲ－5層にはチャートの風化していない石も3個ほど含まれていた。

挿図2　粘り塚古墳地形実測図

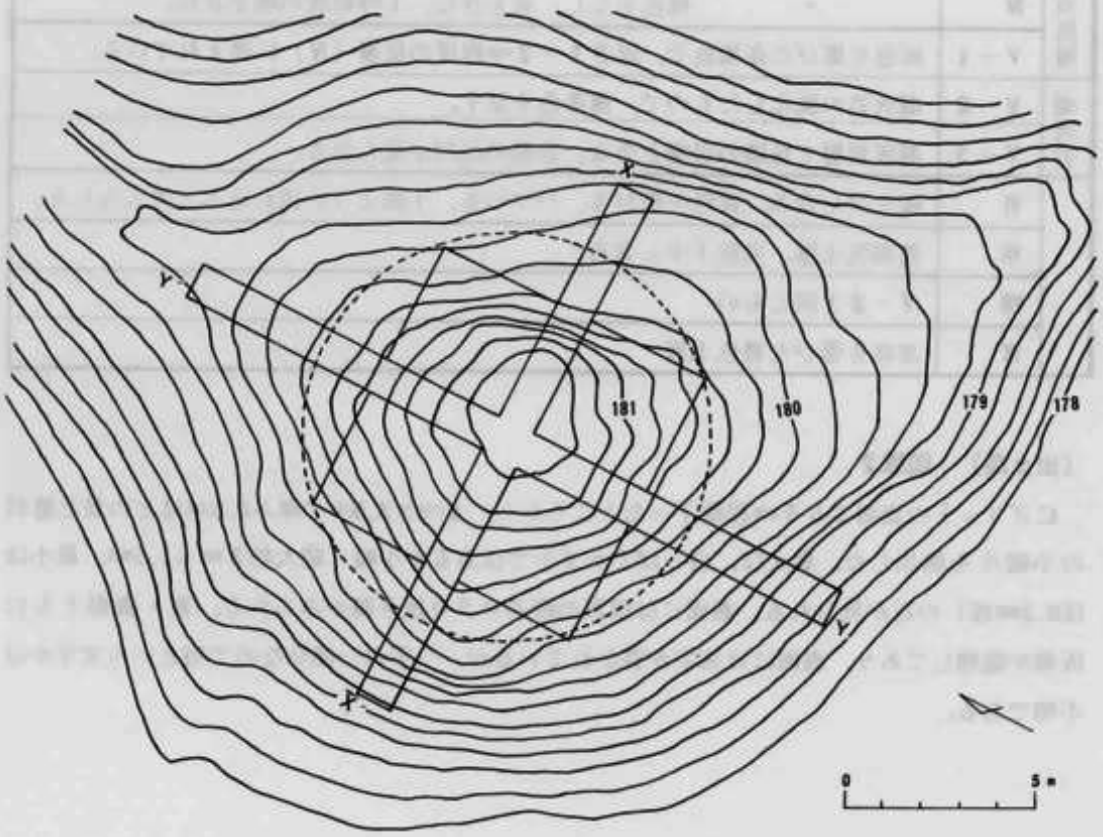


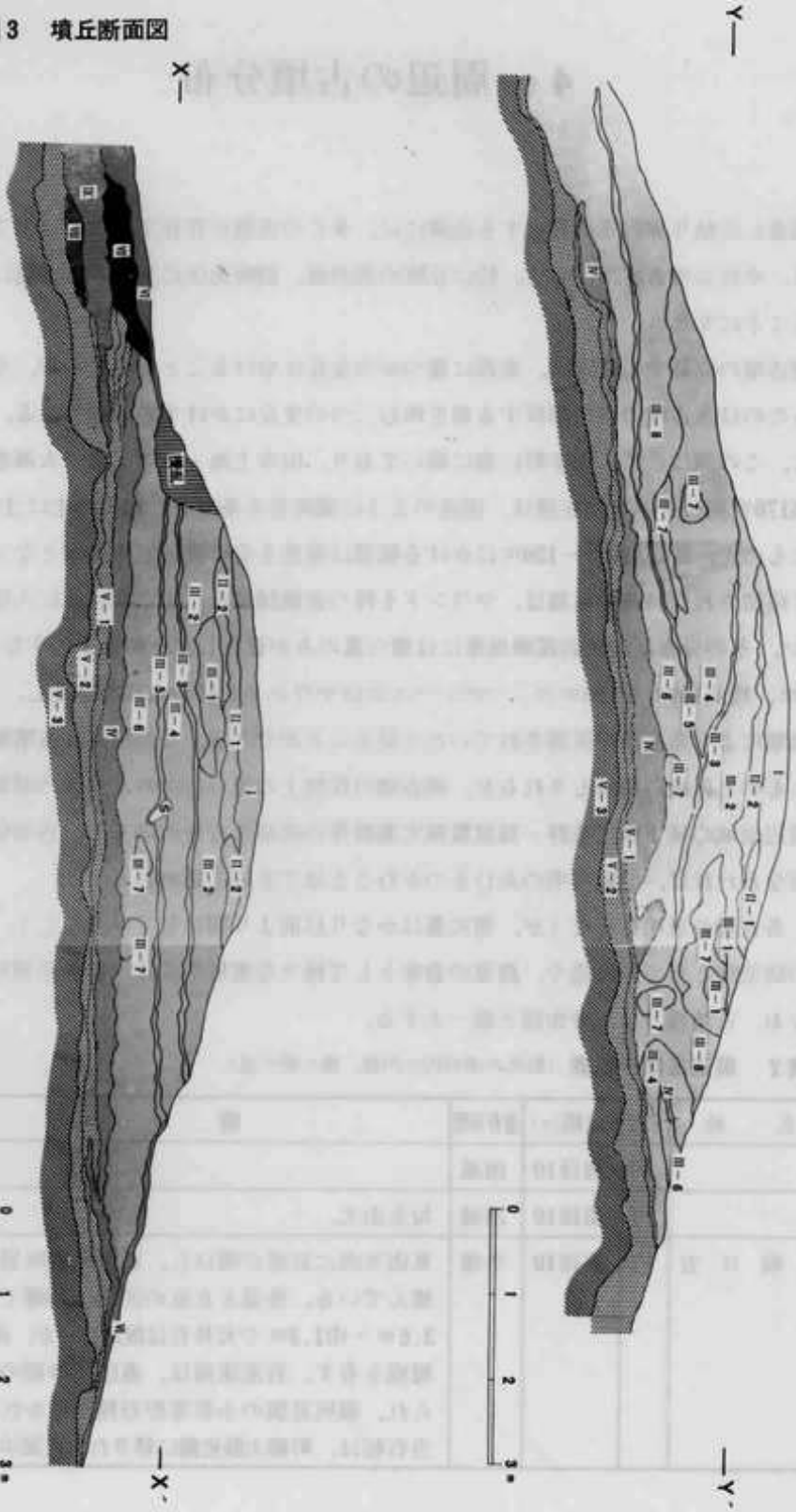
表1　土層

層名		備考
土岐砂礫層	Ⅰ	礫は風化していない。5～10cm程度のチャートの丸石を含み，黄褐色を呈す。
	Ⅱ－1	礫を少し含む。レンガ色をなす。
	Ⅱ－2	礫をほとんど含まない。黄褐色をなす。
	Ⅲ－1	礫は風化している。全体的に白ろっぽく，最大2cm程度の礫を含む。
	Ⅲ－2	〃　少し赤味を帯び，最大2cm程度の礫を含む。
	Ⅲ－3	〃　赤褐色を呈し，バンド状に堆積する。礫2cm程度。
	Ⅲ－4	〃　少し赤味を帯びる。最大1cm程度の小さな礫含有。
	Ⅲ－5	〃　Ⅲ－3と同じもの
	Ⅲ－6	〃　黄褐色を帯びる。5～6cm程度の礫含有。
	Ⅲ－7	〃　赤褐色をなす。点々と大きな礫を含有，最大1m前後。
	Ⅲ－8	〃　炭を少し含み，全体に黒味を帯びる。礫径2～5cm前後。
夾炭層	Ⅳ	〃　褐色をなし，炭を含む。1cm程度の礫を含む。
	Ⅴ－1	灰色を帯びた赤褐色で，厚さ1～2cm程度の炭層（Ⅳ）に挟まれている。
凝灰岩	Ⅴ－2	凝灰岩の風化したもので，薄茶色を呈す。
	Ⅴ－3	凝灰岩層で丘陵の岩盤となる。自然の凸凹が見られる。
	Ⅵ	礫を少し含み，黄色を帯びる。パサつき，上部よりの流れ込みと考えられる。
	Ⅶ	黄褐色土層，炭粒子少し含有。
	Ⅷ	Ⅴ－2と同じもの
	Ⅸ	赤味を帯びた褐色土層

〔出土品〕　図版2

Cグリットの表面より5cm程掘下ったところから，4cm×3.5cmで厚み0.5cmほどの貧乏徳利の小破片を検出した。胎土は，白っぽくわずかではあるが小粒（最大約3mm×1.5mm，最小は径0.3mm程）の石が見られる。裏面には成形の際のロクロ挽き跡がみられる。表・裏面ともに灰釉が施釉してあり，表面には文字が書かれているが，一字の一部分なので何という文字かは不明である。

挿図3　墳丘断面図



4．周辺の古墳分布

今回調査した粘り塚古墳の存在する丘陵には，多くの古墳が存在することはすでに述べた。ここでは，それらの古墳のうちで，特に丘陵の南斜面，羽崎地区に分布する古墳について簡単に触れることにする。

粘り塚古墳の位置する丘陵は，東西に幾つかの支丘に分けることができるが，今回分布調査を行なったのは当古墳の南に開折する洞を挾む二つの支丘にかけての地域である。分布図で見るように，この洞は「Y」の字形に南に開いており，山寺上池・山寺下池・大洞池の溜池がある。標高170m前後を示す当丘陵は，前述のように凝灰岩を基盤とし，その上に土岐砂礫層が堆積したもので，標高120m～150mにかける裾部は浸食を受け凝灰岩の露頭となっている。現在までに確認された36基の古墳は，マウンドを持つ古墳18基と，横穴墓18基に大別することが出来るが，その分布は凝灰岩露頭地帯には横穴墓のみが存在し，その上下，すなわち標高150m～170m，標高100m～120mの二つのレベルにはマウンドを持つ古墳が存在し，はっきりと，古墳の種類により築造地が区別されていたと見ることができる。この区別は古墳築造に関する立地的なものと単純に理解もされるが，両古墳の性格上の違いも含め，今後の問題として行きたい。周辺地域の柿下横穴墓群・皿屋敷横穴墓群等の詳細なる分布調査と，古墳個々の年代の追求が行なわれれば，問題解明の糸口をつかむことはできると思われる。

以下，各古墳の説明を行なうが，横穴墓はかなり以前より開口していたらしく，第二次世界大戦中の防空壕としての改造や，農家の倉庫として種々な変形を受け，形態や規模は不明確である。なお，古墳番号は，分布図と統一とする。

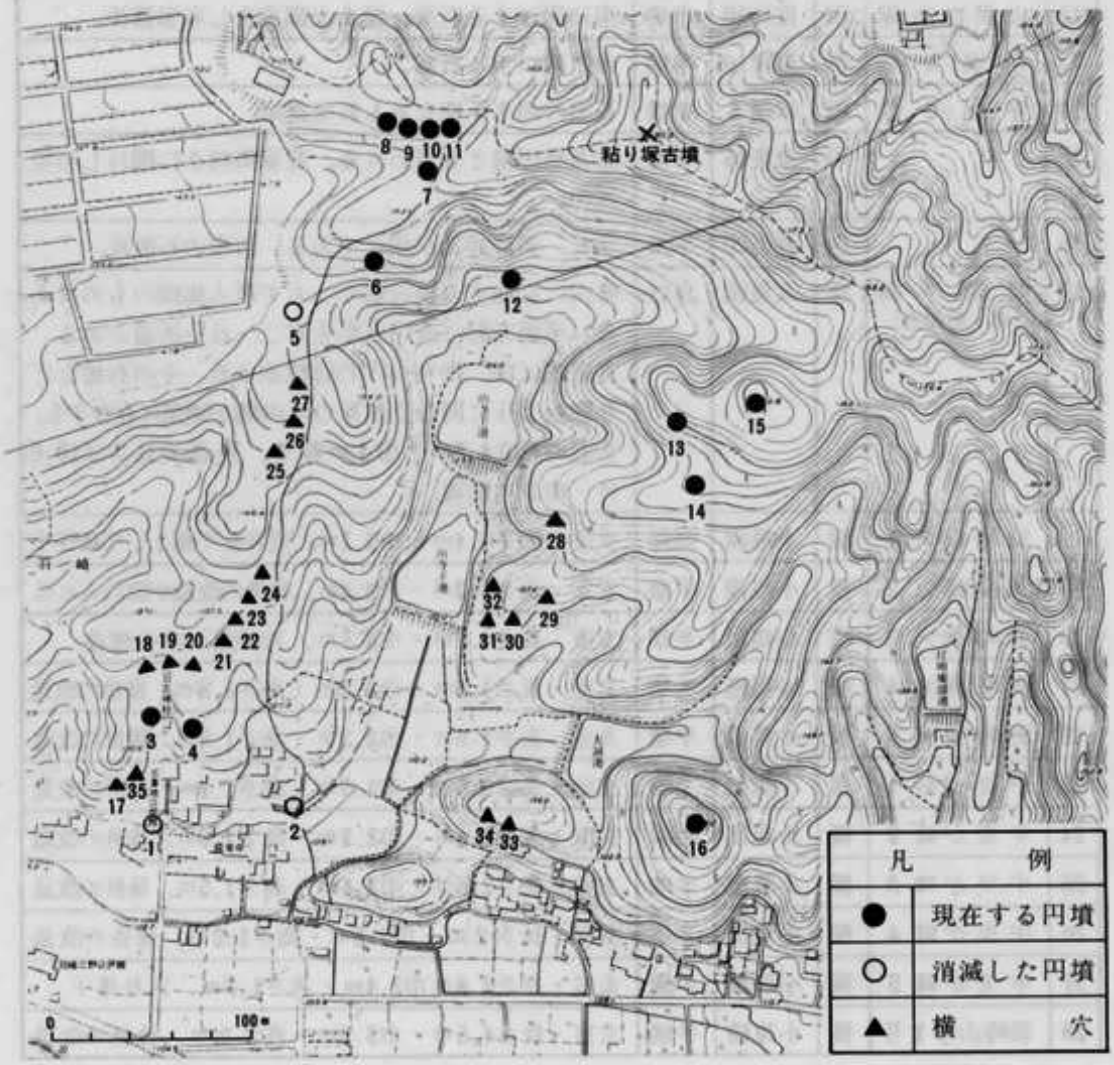
表2　周辺古墳一覧表（形状の項の円＝円墳，横＝横穴墓）

No.	名　称	形状	規模(m)	遺存状態	備　考
1		円	直径10	消滅	
2		円	直径10	消滅	勾玉出土。
3	羽崎日吉	円	直径10	半壊	東南方向に石室が開口し，石室は凝灰岩の切り石を積んでいる。羨道と玄室の区別は明確でなく，長さ3.6m・巾1.3mで天井石は既にないが，高さ1.6mの規模を有す。石室床面は，直径10cm程の礫が敷詰められ，凝灰岩製の小形家形石棺が置かれていた。尚，当石棺は，町郷土歴史館に移され現在展示されている。

No.	名　称	形状	規模(m)	遺存状態	備　考
4	日吉神社東	?	?	全壊	3m×2mの高まり，凝灰岩の造りつけ石棺のみ遺存
5		円	直径20	消滅	明治24年開墾により消滅，石室の石材が石垣として遺存
6		円	直径12.5	良好	
7		円	直径7	半壊	南半分が土取りにより削られている。
8		円	直径5	良好	以下No.11まで，ほゞ同じ規模で，3m程の間隔で一列に並んでいる。古墳か否か疑問な面もあるが一応掲載。
9		円	直径4	良好	
10		円	直径4	良好	
11		円	直径4	良好	
12	大洞白山塚	円	直径20	半壊	南に開口する石室，盛土上部流失し石室露出。
13	寺洞1号	円	直径10	半壊	南に開口する石室。
14	寺洞2号	円	直径8	半壊	石室の向き不明なるも石室露出。
15		円	直径15	半壊	前方後円墳とも思われる。石室南向きに開口し石室露出。
16		円	直径20	半壊	現在，御岳神社が祠ってある。石室の石散乱。
17	羽崎中洞（県・町指定）	横	大規模	良好	町内に存在する横穴墓のうちで最大規模のものである。平面方形に近い玄室を有し，長い羨道がある。玄室内には，作りつけの石棺がある。その石棺をとり囲むように同じく作りつけの棚が両壁に存在する。玄室の長さ4.7m・巾4m程で，羨道の長さは10.6m・巾2m前後。
18	羽崎横穴1	横	小規模	痕跡	玄室・長さ3.4m・巾3.1m，天井なく畑として耕作中
19	羽崎横穴2	横	小規模	半壊	玄室・長さ3.2m・巾2.4m，後世の改造が認められる
20	羽崎横穴3	横	小規模	半壊	玄室・長さ4.2m・巾3.5m，天井落ち半分埋没。
21	羽崎横穴4	横	小規模	半壊	玄室・長さ1.8m・巾2.5m・高さ1.8m，後世の改造
22	羽崎横穴5	横	小規模	半壊	玄室・長さ1.6m・巾2.3m・高さ1.3m，後世の改造
23	中央が峰1	横	小規模	半壊	玄室・長さ2.6m・巾2.5m・高さ1.2m，後世の改造
24	中央が峰2	横	小規模	半壊	玄室・長さ2.4m・巾2.2m・高さ1.0m，後世の改造
25	中央が峰3	横	小規模	半壊	玄室・長さ2.6m・巾2.4m・高さ1.5m，後世の改造
26	中央が峰4	横	小規模	半壊	玄室・長さ2m・巾2.5m・高さ1.2m，後世の改造
27	中央が峰5	横	小規模	半壊	玄室・長さ2.8m巾2.4m・高さ1.7m，天井落下
28	羽崎山寺1号	横	小規模	半壊	玄室・長さ4.5m・巾3.2m・高さ2m，後世の改造

No.	名　　称	形状	規模(m)	遺存状態	備　　考
29	羽崎山寺2号	横	小規模	半壊	玄室・長さ3.5m・巾2.2m・高さ2m，後世の改造
30	羽崎山寺3号	横	小規模	半壊	玄室・長さ2.6m・巾2m・高さ1.3m，後世の改造
31	羽崎山寺4号	横	小規模	半壊	玄室・長さ5m・巾2m・高さ2m，後世の改造
32	羽崎山寺5号	横	小規模	半壊	玄室・長さ1.2m・巾1m・高さ1m，後世の改造
33		横	小規模	半壊	玄室・長さ3.2m・巾2m・高さ1.8m，後世の改造
34		横	小規模	半壊	玄室・長さ3.4m・巾1.8m・高さ2m，後世の改造
35	羽崎中洞横穴	横	小規模	半壊	玄室・長さ5m・巾3.5m・高さ1.8m，後世の改造

挿図4　周辺の古墳分布図



5．結　　語

先述のように当古墳は，山頂に位置し自然的風化作用を強く受け，樹木も成育していなかった。従って調査以前に既に墳丘をはじめ古墳をとどめる一切のものが流出してしまっていたのか，人為的なものは，出土品で述べた徳利の小破片1点のみであって，当古墳そのものの考古学的追求をすることは不可能であった。

しかし，当古墳の存在する丘陵周辺の古墳分布調査により，高塚古墳と横穴墓の築造地が凝灰岩の露頭状況や標高差による違いがあることが判明したことは，今後，当地域の古墳研究の一つの手がかりを得たことになる。

註　(1) 中島勝国「可児町神崎山古墳発掘調査報告書」　1976．11

粘り塚古墳遠景　―― 北側から望む ――

粘り塚古墳近景　―― 西より望む ――

粘り塚古墳近景　―― 東より望む ――

発掘調査中　── Dグリット表土はね ──

墳 丘 断 面　── D・Bグリット ──

出 土 品

墳丘断面　── Aグリット ──

日吉古墳石室

日吉古墳出土の石棺（現在，可児郷土歴史館に展示中）

白山塚古墳石室

羽崎中洞横穴墓

羽崎中洞横穴墓玄室（中央は作りつけ石棺）

No.34　横穴墓

粘り塚古墳発掘調査報告書

昭和52年7月10日　印刷
昭和52年7月30日　発行

発行所　岐阜県可児郡可児町
可児町教育委員会